

聖書の言葉

平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2017年8月13日（日）発行

宗教法人

野毛山キリストの教会

〒220-0032 横浜市西区老松町30番地

絵本 ヒロシマの少年 じろうちゃん 作・やまだみどり 絵・みなみなみ

コカリナ奏者 黒坂黒太郎さんを通してこの絵本と出会ったのは昨年のことです。来年の「平和を語る会」でぜひ紹介したいと思っておりました。大谷正義兄のお話とじろうちゃんが被りました。戦後72年となり、戦争を体験した方が少なくなっています。可能な限りお話を伺い、過去の過ちを繰り返さないように、祈り続けていきたいと思えます。みなみなみさんの絵に酒井大志兄の朗読、最後にBGMで流れた被爆樹で作られたコカリナで演奏された黒坂黒太郎さんの「空」は心を打つものでした。じろうちゃんは作者のお兄さんだそうです。作者は私たちにできることは何かを問いかけてくれます。(奈良聖)

じろうちゃんは、明るく元気な子でした。妹たちが歌をうたっているとやってきてその歌にあわせて踊りだすような少しお調子者のところもありました。

1945年8月6日、その日、中学1年生のじろうちゃんは、学校のみならず広島市内の今の原爆ドームが見えるところで建物をとりこわす作業をしていました。その頃、日本は戦争をしていて、空襲がだんだんひどくなっていました。家をこわして、爆弾が落とされたとき火がもえ広がらないようにするためのあき地をつくっていたのです。

おおくのおとなの男の人は戦争に行っていたので、中学生や女学生がそのきつい作業をしていたのです。その日も出席の点呼が終わり、みんなで作業に取りかかったときでした。

午前8時15分
強い光と同時に何かが上空で炸裂したような衝撃がはしり、じろうちゃんや友人たちは気をうしなっていました。

しばらくして、気がついたときにはじろうちゃんは、くずれた建物の下敷きになっていました。すぐそこまで炎がせまっていたが、身動きができませんでした。

じろうちゃんたちは、みんなではげましあいながら、そばをにげまどっている人々に向かって「たすけてー」と声のかぎりにさげびました。
しかし、その声はとどきませんでした。
必死でもがいていると、じろうちゃんのからだは、重くのしかかった大きな柱から、とつぜん抜け出したのです。

そのときです。炎は怪物のようにのしがっておしよせ、今までそばにいた友だちをつぎつぎと飲みこんでしまいました。

ひとりたすかったじろうちゃんは、一日中歩いて、やっとの思いでとおくにある家にたどりつきました。

顔は煤(すす)にまみれたように黒く、風船のようにふくれあがっていたので、家族にもなかなか見分けがつかせませんでした。

じろうちゃんは、家族や見舞いにきた近所の人たちに自分のみてきた地獄のようなできごとを三日三晩話し続け その後、たおれこみ、そのまま眠り続けてしまいました。

3か月後、じろうちゃんは意識をとりもどしました。しかし、明るい調子者のじろうちゃんではありませんでした。この日から8月6日にみた地獄のようなできごとについてはいっさい口をとぎしてしまいました。あの日、いっしょにいた友だちは焼け死んでしまい、自分だけが生きのこってしまったことが心の傷となってしまったのです。

2011年3月11日
東日本大震災がおき、福島では原子力発電所の事故がおきました。ヒロシマ、ナガサキ、ビキニと放射線の被害を受けた日本が放射線による被害を起こしてしまったのです。

じろうちゃんは「悲しい、くやしい」と胸がつまる思いになりました。あのヒロシマでみた地獄のできごとを65年間語らないうることを悔やみました。原爆がどんなにむごいものであるかを体験した者が、おおくの人に伝えなければならなかったのだと。それは生き残った自分の使命なのだ、そしてそれがあの日なくなった友だちへの供養になるのだと。

80歳になったじろうちゃんは、とぎしつづけてきた重い口をひらき、あの日、8月6日にヒロシマで起きたことを人々に語り伝えるようになりました。
そしてその姿は、亡くなった友への折りのようでした。



広島（ヒロシマ）

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。原子爆弾リトルボーイは、第33代アメリカ合衆国大統領ハリー・S・トルーマンの原子爆弾投下の大統領命令を受けたB-29（エノラ・ゲイ）によって投下されました。

この1年に亡くなった方 5530人
計308725人

長崎（ナガサキ）

広島の日後の1945年8月9日午前11時2分、B-29（ボックスカー）が長崎市に原子爆弾ファットマンを投下しました。

この1年に亡くなった方 3351人
計175647人

子ども代表「平和への誓い」

原子爆弾が投下される前の広島には、美しい自然がありました。
大好きな人の優しい笑顔、温もりがありました。一緒に創るはずだった未来がありました。
広島には、当たり前の日常があったのです。
昭和20年（1945年）、8月6日午前8時15分、広島は焼け野原となりました。
広島は失ったのです。
多くの命、多くの夢を、失ったのです。
当時、小学生だった語り部の方は、「亡くなった母と姉を見ても涙が出なかった」と語ります。感情までも奪われた人がいたのです。
大切なものを奪われ、心の中に深い傷を負った広島の人々。しかし今、広島は、人々の笑顔が自然にあふれる街になりました。草や木であふれ、緑いっぱいの街になりました。
平和都市として、世界中の人に感心を持たれる街となりました。
あのまま人々が諦めてしまっていたら、復興への強い思いや願いを捨てていたら、苦しい中、必死で生きてきた人々がいなければ、今の広島はありません。
平和を考える場所、広島。
平和を誓う場所、広島。
未来を考えるスタートの場所、広島。
未来の人に、戦争の体験は不要です。
しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。一人ひとりの命の重みを知ること、互いを認めあうこと、まっすぐ世界の人々に届く言葉で、あきらめず、粘り強く伝えていきます。
広島の子供の私たちが勇気を出し、心と心をつなぐ架け橋を築いていきます。

平成29年（2017年）8月6日
こども代表
広島市立大芝小学校6年 竹外直柔
広島市立中筋小学校6年 福永希実



平和の握手
主の平和がありますように